

NGO 活動紹介

ゆうちょ財団では、2022 年 2 月のロシアによるウクライナへの侵攻により、戦禍を逃れて国内外に避難しているウクライナ国民を支援するため、従来から行っている NGO 海外援助活動助成制度にウクライナ避難民支援特別枠を設けて、3団体の助成を決定しました。認定 NPO 法人地球市民の会はそのうちの1団体です。

認定 NPO 法人地球市民の会は、佐賀県・佐賀市・CSO(市民社会組織)連携でウクライナ避難民の受け入れを行う「SAGA Ukeire Network～ウクライナひまわりプロジェクト～」の事務局を務めており、避難民の佐賀への受入れの調整や手続、生活用品の調達など、受入れのその日から生活ができるよう、様々な支援活動を行っています。

今回、この活動の一環で佐賀に受け入れたウクライナの3名の方にゆうちょ財団がインタビューしました。

——最初にご自身のことを教えてください。また、ご家族とともに日本に避難されていますか。

ナタリアさん：私はキーウで暮らす年金生活者でした。以前は、医者として勤務していましたが、夫と息子と娘の4人家族です。ウクライナでは成人男性は国外に出られないため、日本へは娘と避難してきました。夫と息子はウクライナに残っています。

アリーナさん：私はハルキウ州で弁護士として働いていました。家族は夫と娘と3人で、日本へは娘と避難してきました。夫はウクライナに残っています。

オレグさん：私は1991年から年金生活者でしたが、キーウでは弁護士もしていました。第3種障害者として認定されていたので、徴兵対象にならずに国外へ出ることができました。家族は妻と娘2人です。先に妻と娘2人が日本へ避難し、私は半年ほど遅れて合流しました。



右から

サイノグ・ナタリアさん

レセチコ・オレグさん

グルシャエバ・アリーナさん

——最初にロシアの軍事侵攻が始まった時、どう感じましたか。また、何か行動を起こしましたか。

ナタリアさん：キーウの爆発音で目が覚めてから、母と妹の家族とキーウ郊外の別荘に避難しました。夫は仕事に行きました。私たちは2月から7月までそこに滞在し、その間ずっと夫は仕事でキーウに行っていました。

アリーナさん：2月の侵攻が始まった時を思い出すのはとても辛いです。1回目のミサイル攻撃が住んでいた自宅の20km先に落ち、とても大きな破壊音がありました。どんな風の音でも起きなかった娘も飛び上がって起きました。とても恐ろしい思いで朝を迎えたことを覚えています。侵攻が終わらず、このまま自宅にいても出口が見えなかったのも、侵攻が始まってから1ヶ月後、実家のクレメンチュクへ避難しました。しかし、クレメンチュクにもミサイル攻撃があったため、この地域で住める場所はないと感じていました。

オレグさん：2月24日にキーウで大きな爆発音があった家族で目を覚ましました。自分は家族を支える大黒柱なので家族に怖がる様子を見せまいとしていましたが、特に子どもの怯えた様子を見ているのは非常に辛く感じました。戦争が始まったとは信じられませんでした。

侵攻が始まった当初は、なかなか現実が受け入れられなかったのですが、周りの様子を見て、家族が戦争から避難することが不可欠だと感じました。妻と子ども二人が避難した後、私はしばらくキーウに滞在していましたが、2023年2月のある時点で、自分にとって家族も子供もいないのは辛いという結論に達しました。これも地球市民の会をはじめ日本の皆様の支援のおかげで、非常に感謝しています。



サイノグ・ナタリアさん

——日本に来たきっかけは何ですか。支援プログラムがあることはどうやって知りましたか。

ナタリアさん：娘が日本語教室に1年間通っていました。ちょうどそのコースが終了し、日本の色々な都市で外国人留学生を受け入れるプログラムがあると聞いて、情報を収集していました。日本への避難をサポートしている日本ウクライナ友好協会“Kraiany”のオレナ・スヴィドランさんと連絡を取り、日本へどうすれば避難できるのかを聞いたところ、ちょうど翌日から佐賀でひまわりプロジェクトの2回目の避難民の募集が始まるという情報を得たため応募しました。

アリーナさん：昔から日本に興味があり、日本料理にもとても興味がありました。娘が日本のアニメや漫画が大好きで、一度日本へ行きたいと話していました。住んでいた地域にいてもこれ以上生活ができないと思い始め、どこへ避難するべきか娘と考えた時に、まず日本へ行くことができないか調べました。ひまわりプロジェクトの避難民支援プログラムを見つけることができたのは本当に偶然でした。困難な状況から救ってくださった日本の皆さんへ感謝をお伝えしたいと思います。

オレグさん：私は2000年に1ヶ月、2005年に半月ほど日本に滞在したことがあります。

避難先としてヨーロッパは考えず、日本を選びました。理由はやはり日本の文化、安全面です。一番大事だったのは、安全に暮らせるということと子どものためです。それから日本の法規制がドイツと似ていると聞いており、仕事でヨーロッパの法制度を学んでいたのも、日本の生活に馴染むことができるだろうと思いました。ひまわりプロジェクトの避難民支援プログラムについては、家族とインターネットで調べました。

——現在の生活で不便を感じていることはありますか。

ナタリアさん：日本語は難しい言葉ですが、言葉が分からなくても生活に支障はないと感じています。もちろん、ポケットやスマホがなければ生活に困ったかもしれませんが、何よりも日本の人たちが大変親切で、助けようという姿勢が非常に強いので助かっています。

アリーナさん：不便と思うことはほとんどありません。一つあげるなら、私は免許を持っていないので、佐賀では車を使えません。かなりの距離荷物を持って歩かなければならないところは苦労しているところです。

オレグさん：現在、ウクライナには充実した生活はありません。空襲警報、停電、インターネット断絶の期間中は、多くの機関が機能しません。フルタイムの仕事也没有ありません。戦争の苦難についてはいくらでも話せます。

一方、日本の生活で不便に思うことはありません。祖母はいつも「ゲストとして迎え入れられたら、もう何も考えずに、もてなしのありがたみを感じるんだよ」と繰り返していました。家族と一緒に日本に来て快適に過ごせることを嬉しく思います。30年ぶりに自転車に乗りました。とても気に入っています。



レセチコ・オレグさん

——戦争が終わってウクライナに帰れたときに、まず何をしたいですか。

ナタリアさん：今、子どもの教育がちょうど節目（学期の終わり）になっています。9月から新学期が始まりますが、オンライン授業受講では在学の継続が難しいと一般的に言われており、子どもの勉強を優先するべきか、佐賀での安全な暮らしを優先するべきか今決めかねていますが、必ずウクライナへ帰りたいと思っています。私は、復興に際してウクライナの社会が日本のように秩序が保たれ、社会福祉が充実し、エコが重視される社会となるよう構築できればいいと願っています。

アリーナさん：娘が日本の大学へ進学できることを一番に願っていますし、私も帰ることはあまり考えたくありません。もし、帰ることがあれば、日本の和食や、今習っている習字の教室を開いてウクライナの人々に伝授していきたいと思っています。

オレグさん：私たち家族は日本に永住したいと考えています。



グルシャエバ・アリーナさん

——最後に、世界に向けて訴えたいことや伝えたいメッセージはありますか。

ナタリアさん：ロシアが核兵器を使用して悲劇をもたらすのを防ぐため、国際社会はロシアを止めなければなりません。

もしウクライナがこの戦争に負ければ、ウクライナもなくなりますしウクライナ人もいなくなります。ロシアが戦闘をやめれば、戦争も止まるでしょう。最新のニュースでは、カホフカダムが爆破されたと報じられています。「ウクライナがやったかロシアがやったか」という議論があります。私が強調したいのは、カホフカ水力発電所は1年間ロシア軍によって占領されていたということです。

アリーナさん：今の一番の世界へ向けたメッセージは、ロシアの侵攻を止めることです。

色々な国が協力して侵攻を止めて終わりにして欲しいと思います。

オレグさん：追加するならば、世界平和です。それから、一人一人の希望が叶う社会になってほしいと願っています。

——みなさん、ありがとうございました。



認定 NPO 法人地球市民の会とウクライナひまわりプロジェクト

認定 NPO 法人地球市民の会は、ウクライナ避難民の佐賀への受け入れを進める官民連携組織「SAGA Ukeire Network～ウクライナひまわりプロジェクト～」の事務局を務めています。このプロジェクトでは、全国に先駆けて官民連携を打ち出し、さらには応募フォームを公開して、日本に身寄りのない方も積極的に受け入れるなど、「佐賀モデル」の避難民支援を実施しています。

佐賀では、避難民の方が佐賀に入ったその日から生活が始められる体制を整えています。具体的には、住居は佐賀県が提供し、家具は佐賀市や CSO（市民社会組織）を中心に、企業や個人からの寄付を集め、家財道具を一式提供しています。



避難民の方が入居する住居の清掃を行う
ウクライナひまわりプロジェクトのスタッフ



避難民の方の空港での出迎え



オレグさんが佐賀に来て家族と合流した様子

しかし、企業や個人からの家具などの寄付も、タイミングが合わないことが多く、新たに購入せざるをえないこともあります。

2022 年度のゆうちょ財団ウクライナ避難民支援特別枠の助成では、新たに購入する様々な生活用品の購入資金や、それまで財源の付かなかったビザ取得までのポーランドなどでの滞在費用、出国前 72 時間に必要な PCR 検査費用等に対する助成を行いました。

この助成活動期間に日本に入国した避難民は、4 組 12 名でしたが、ウクライナひまわりプロジェクト全体では 2022 年 4 月以降、18 組 39 名のウクライナ避難民を受け入れています。

SAGA
ukeire
Network



ウクライナ
ひまわりプロジェクト

ウクライナ危機により避難を余儀なくされた市民を
佐賀県で受け入れるため設置した、
佐賀県、佐賀市、CSO(NPO)による官民連携組織です。
渡航から生活までワンストップで支援しています。

ウクライナ・日本語会話帳を作成し公開しています

地球市民の会のウクライナ避難民支援の担当者の方にインタビューをしました。

《ゆうちょ財団》:ウクライナ避難民の方の支援活動で一番苦労したことは何ですか？

《地球市民の会》:資金難と人手不足かと思います。当初、30組を目標に避難民の受入れを始めました。資金難と人手不足以外にも要因はありますが、やはりその二つがネックとなって、これまで18組を受け入れるのがやっとという状態です。



佐賀県提供の住居に家具を運ぶ
地球市民の会インターン



来日初日のオリエンテーション

《ゆうちょ財団》:日本にきたウクライナ避難民の方の相談の内容で、一番多いものは何ですか？

《地球市民の会》:相談窓口は別の団体が担当していますが、聞いている範囲では、これまで日本語を全く学んだことがないという方もいらっしゃいますので、語学に関する心配が多いです。また、就労希望の方について、これまでの経歴とマッチした仕事がなかなかないことと、日本語も英語もできない場合にも困難があるようです。そのほか、ウクライナ料理を作りたいが、ウクライナの食材や調味料が手に入りにくいなどの声もありました。

『NGO 海外援助活動助成 NEWS レター』創刊にあたって

『NGO 海外援助活動助成 NEWS レター』創刊号をここにお届け致します。

今回、ウクライナ避難民の方のインタビューを取り上げましたが、今後も、助成先の NGO やその活動の紹介、ニュースなど、国際協力をめぐる話題を広く取り上げ、定期的に発信していきます。

一般財団法人 ゆうちょ財団 国際ボランティア支援事業部